令和３年度　清流の国ぎふ・おすすめの１冊コンクール

紹介文部門　金賞

金賞

「どんでん返しのストーリー」にひっくり返されてしまった私

（中島匠郷）

［おすすめしたい本］

『５分で驚く！　どんでん返しの物語』

「このミステリーがすごい！」編集部／編

「５分で読めるどんでん返しのミステリー？」「衝撃の結末？」。

大げさなキャッチフレーズだなぁと思い、何気なく書棚から手に取ってみた。そんなインスタントラーメンのような都合のいい話があるわけがない。壮大な世界観に浸り、登場人物の置かれた状況や心情に没入できるようなものこそ物語なのだからと鼻で笑った。まあ５分で読めるのならというのがこの書との出会いだった。

実は、この本を手にとったのにはもう一つ理由がある。勝負してやろう。知恵比べしてやろうという斜に構えた私がいたからだ。数十ページ程度で終えるどんでん返しのストーリーなんて、オチが読めるだろうから先回りしてやろう。「ほらね。やっぱりそうきた」と優越感に浸ってやろうという意地悪な気持ちが働いたためだった。

ご察しの通りとはなるが、「私自身の紹介文」のオチは誰もが予測できるため、どんでん返しでも何でもなかった。本を読む前の自分に、アホはお前だと叱りつけてやりたい。序盤こそ連勝し、ホレ見たことかとほくそ笑んでいた私の表情は、読み進めるに従って段々と険しいものになっていき、情けない顔となり、最後は投了する将棋の棋士のように参りましたと首を垂れたのだった。どんでん返しのストーリーだから、ここに内容を書けないのが悔しい。「これって残り数ページでどうやってオチを持ってくるの」、「そうきたか。やられた」と翻弄されてばかりで、まさしく完敗だった。

この本は、短編小説なんて薄っぺらいという私の偏見・先入観を見事に変えてくれた一冊だった。私と同じように、知恵比べしてみたい方は是非。背筋がゾクッとするような話から、ホッコリする話まで様々な内容があり、バリエーションも豊富だ。余談だが、やられたという感覚は、映画の「猿の惑星（初期）」の結末に似ているかもしれない。５分で読めるというキャッチフレーズも本当で、合間の時間にも読む事ができるのでお勧めの一冊だ。

令和３年度　清流の国ぎふ・おすすめの１冊コンクール

紹介文部門　銀賞

銀賞

あなたの知らない世界の見方　（箕浦日菜）

［おすすめしたい本］

『FACTFULNESS　10 の思い込みを乗り越え、データを基に世界を正しく見る習慣』

ハンス・ロスリング、オーラ・ロスリング、アンナ・ロスリング・ロンランド／著

私は、この本を読むまで自分は世界のことをよく知っていると思っていた。ニュースなどで世界には貧困に苦しむ人や、学校に行けないような人が大勢いることも、大気汚染などの環境問題があることも耳にしていた。そして、世界の状況はどんどん悪くなっているのではないかとも思っていた。あなたもそうではないだろうか。

この本の始めには１３の質問が書かれている。その１つに次のような問いがある。「世界の人口のうち、極度の貧困にある人の割合は、過去２０年でどう変わったでしょう？　Ａ約 2 倍になった　Ｂあまり変わっていない　Ｃ半分になった」

あなたはこの問題の正解が分かるだろうか。少し考えてほしい。正解はＣ。世界の人口のうち、極度の貧困層の割合は半減している。この問題はわずか７％の人しか正解していないそうだ。この問題を正解できなかったり、根拠を持って答えられなかったりしたのなら、ぜひこの本を読むべきだ。私はこの本を通して自分の無知と勘違いに気づくことができた。私達が持つ１０の思い込みについて、データを基に正しい世界の情報を教えてくれる。そして、どうしたら私達が世界を正確に捉えることができるのかを教えてくれる。

新型コロナウイルスが蔓延している今、多くの情報が溢れていて何を信じれば良いかが分かりにくい。ネガティブな情報ばかりが目についてしまう今だからこそ、自分自身で正しいデータを見て考えることが大切なのではないだろうか。自分の知らない世界の現状を知りたい人、自分の知っている情報が正しいか知りたい人、世界は優しいものだと思いたい人、そんな人はこの本を読んでほしい。

私は、分厚くて、データばかりが載っているこの本が自分をワクワクさせて、ポジティブにしてくれるとは思いもしなかった。あなたも、一緒にこの感動を味わってみよう。

令和３年度　清流の国ぎふ・おすすめの１冊コンクール

紹介文部門　銅賞

銅賞

踏み出す一歩のその裏に　（田中咲子）

［おすすめしたい本］

『登り続ける、ということ。山を登る　学校を建てる　災害とたたかう』

野口健／著

「山に登る　学校を建てる　災害とたたかう」表紙のテーマが目に留まった。

野口健さんと言えば、一九九九年、エベレスト登頂に成功し、七大陸最高峰世界最年少登頂記録を樹立した人だ。そんな有名な登山家が、なぜ学校を建て、災害と戦っているのか興味を持った。

原点は、外交官だった父にあった。父は、観光客が行かないような場所に、あえて野口さんを連れて行き、その国の有りのままを見せた。時には、社会の不条理を目の当たりにする事もあったが、父は光の届かない世の中の「日陰」にこそ真実があり、取り組むべきテーマがあると教えてくれた。

その後、登山家になった野口さんは、ヒマラヤの現地民登山ガイド「シェルパ」と親交を持つ。登山家とシェルパは一心同体で山に登るが、光が当たるのは登山家だけだ。さらに、一家を支えるシェルパが登山中の事故で亡くなった場合、残された家族には困窮が待っている。

その事に疑問を持った野口さんは、自ら「シェルパ基金」を立ち上げ、亡くなったシェルパの子どもへの教育支援を続けている。

野口さんにとっては、登山だけでなく、自給自足の生活を送っているサマ村も、災害も、全てが自分と繋がっている。だから、サマ村のために学校を建て、被災地にテント村を作る。自分に出来る事があれば、挑戦せずにはいられないのだ。

多様でグローバルな活動の裏で、時には失敗し、苦しみながらも野口さんは進み続けている。その姿に刺激を受け、私はこのコンクールへの応募を決めた。一歩踏み出せば、新たな景色が広がっていると、この本は教えてくれた。

野口さんは、かつて植村直己さんの著書『青春を山に賭けて』を読み、それがきっかけで山に登り始めた。この本も、きっと誰かの挑戦を後押しし、人生に影響を与える一冊になるだろう。

令和３年度　清流の国ぎふ・おすすめの１冊コンクール

紹介文部門　奨励賞

奨励賞

がんばりすぎなくていいよ、と微笑んでくれる本（牧村幸）

［おすすめしたい本］

『一汁一菜でよいという提案』　土井善晴／著

「お母さん、毎日お弁当だけど大丈夫？」

娘の口から恐ろしい言葉を聞いてしまった。そんなことは、もちろん知っている。とうとうこの日が来てしまった。

明らかに娘は心配していた。なぜなら私は弁当作りが苦手だからだ。今までの行事は、卵焼きとソーセージで誤魔化してきた。しかし毎日それでは、さすがに飽きるだろう。

「大丈夫、図書館で研究してくるから」

心配そうな娘を尻目に、すぐさま図書館へ走り、弁当本やおかず本を借りられるだけ借りてきた。

キャラ弁作りから逃げ、何とか今まで学校行事を逃げ切ってきたものの、ついに来てしまった、毎日高校弁当。

数ある料理本をパラパラめくり、私がたどり着いた結論がこの本だった。読めば読むほど温かい気持ちになった。

そうだ、私は毎日ハレの日の料理を作ろうとしていたから、料理は疎か、弁当作りも嫌になっていたことに気付いた。

土井先生は、日本人の基本は味噌汁だと言う。私は、弁当もそれで良いと解釈した。早速、娘にスープジャーという便利な保温ポットを購入した。そして毎朝、茄子や大根など季節の野菜を入れた味噌汁を作ることにした。温かい味噌汁があることにより、ご飯少しとちょっとのおかずで済む。おかずは前日の残りでも良い。食事の基本は全て日本人の心、味噌汁とご飯だ。

この本のお陰で毎日の食事作りも気楽になった。ごちそうばかりを作ろうとせず、無理しなくても良いと言ってくれている。毎日頑張っていた私に、「そんなに頑張らなくていいよ」と優しく肩に手を置いてくれているように感じた。

そして、毎日の料理の悩みの解決策が、こんな身近にあるということを教えてくれた。幸せの青い鳥を家の中で見付けたような気持ちになれる一冊です。

令和３年度　清流の国ぎふ・おすすめの１冊コンクール

紹介文部門　奨励賞

奨励賞

朝読や隙間時間にぴったり！これであなたは岐阜県民マスター

（樋口恵美子）

［おすすめしたい本］

『この道この人　岐阜県』　岐阜県小中学校長会／編

本棚を整理していると、懐かしい本が一番下の端で埃をかぶっていた。小学６年のとき夏休みの読書感想文を書いた本だ。岐阜県出身の１８人の伝記集である。目次を見ると６人の名前の上に鉛筆で丸印がついていた。当時、どの人物にしようか迷ったのであろう。確か、中村久子さんについて感想文を書いたと思う。もう一度読んでみる。

子育てを経験した今、両親や祖母の深い愛情や葛藤、苦しみに共感して思わず涙が出た。手足のない久子が一人で生きていけるよう心を鬼にして裁縫をさせた母の気持ちを考えると、過保護ぎみの自分を反省する。一方、障害に対する心無い言葉や態度は今の社会と何ら変わっていない。久子が苦労を重ねて縫い上げた大切な人形の着物を仲良しのみちにあげた時、みちは喜んだのに、みちの母は「どぶへ流してしまえ。」と言った。１００年たっても偏見や差別は残っている。人間の弱さや驕りは、私の中にもある。改めて日頃の生活を見つめ直さなければならない。そのためには障害のある方たちが何を思い、考えているのかを知る必要がある。今ならすぐ情報を得ることができるが、７０年以上前に久子は日本各地を講演して歩き「光るだるまさん」と親しまれたそうだ。久子の勇気と慈愛に満ちた行動に敬服し、岐阜県民として誇りに思う。

他にはオリンピック陸上棒高跳び選手、沢田文吉さんの話がある。コロナ禍で延期された東京２０２０オリンピックと重なる部分があり、選手たちの想いを考えるとテレビ観戦にも熱が入った。

画家の熊谷守一さんや昆虫博士の名和靖さんについても書かれている。どの話も自分を信じ、絶え間ない努力で偉業を成し遂げた生き様を垣間見ることができる。

ちょっと古くて重たい本だけど、一人あたり十数ページ。朝読書や隙間時間にさっと読めます。読めばあなたはふるさと岐阜のことがもっと好きになるでしょう。

令和３年度　清流の国ぎふ・おすすめの１冊コンクール

紹介文部門　奨励賞

奨励賞

大切な命　（長尾彰）

［おすすめしたい本］

『神様のファインダー　元米従軍カメラマンの遺産』

坂井貴美子、ジョー･オダネル／著

「焼き場に立つ少年」の写真を初めて目にして知ったのは、撮影者のオダネル氏死去を報じた小さな新聞記事であった。写真が衝撃的で涙がすぐにあふれた。とても悲しく心が痛くなる写真である。その記事だけを切り取って自分の机の前に以来置いている。戦争は何の罪もない死んではいけない人を殺してしまう。その写真が一冊の本の中に収められて出版された。即買った。弟を背負っている少年の唇の血のことを知って涙が止まらなくなった。写真とそれほど長くない文章だけで浮かんでくる様々な想像が心を締め付けてくる。この兄弟はどのように日常を過ごしていたのだろう、弟の最期に接した兄の気持ちはどうだったのだろう、兄はその後幸せに暮らせたのだろうか等々、また涙があふれてしまう。原爆投下後のいろいろな写真が記事とともにある内容で、後世までも残すべき一冊である。読みながら、悲しみや怒りがあふれてくる。今の豊かな日本はこの本にあるような経験を経て成り立っている。戦争を実際に体験していない世代がほとんどになってきたからこそ意味を持つ一冊である。今でも紛争や戦争のような争いが世界のどこかで起こっている。何の罪もない死んではいけない人が死んでいる。戦争の愚かさを教えてくれるこの一冊を一人でも多くの人に手にして写真を見て読んでもらいたい。

令和３年度　清流の国ぎふ・おすすめの１冊コンクール

紹介文部門　奨励賞

奨励賞

血の繋がりよりも深い愛を知って　（田島葉々）

［おすすめしたい本］

『そして、バトンは渡された』　瀬尾まいこ／著

この物語が実写化され映画になると、ニュースで耳にしたとき、「原作を一度読んでみたいな」とぼんやり思った。それからしばらくたったある日の朝読書の時間、何かいい本はないかと教室の本棚を見ていたとき、この本に目が留まった。私は意外とすぐに、この本に出会えた。

この物語の主人公は森宮優子、１７歳だ。１７年の人生の中で７回も家族の形態が変わり、４回も名字が変わっている。家族が何回も入れ替わるというところから、なんとなく不幸な生い立ちを想像してしまうと思うが、この物語は「困った。全然不幸ではないのだ。」という私達が想像していることとは真逆の言葉で始まる。私は家族が変わるということを体験したことはないけれど、きっと辛さや悲しさがあってもおかしくないはずだ。優子は幼い頃から、難しく大事な選択を迫られ、出会いと別れを繰り返し、悩み、しかし、そのたびに強くたくましく真っ直ぐに成長してきた。本当に強くて優しい子なのだからかな。そう思った。ただこれは優子だけの力ではない。どの親も親になるという覚悟がちゃんとあった。試行錯誤の連続だとは思うけれど、優子のことをいつも一番に考えて、優子と過ごす時間を大切にしていた。それは、各々のやり方で最善を尽くそうと奮闘する日々があってこそだ。

最初から最後までこんなにも愛の暖かさを感じた本はない。ときどきくすっと笑える優子と森宮さんとの会話や、物語のたくさんの場面で出てくるおいしそうな食べ物たち。オムレツに、カツ丼に、餃子に、長文メッセージのオムライス……。想いのぎっしりと詰まったごはんがこの物語に色をつけ、鍵を握っている。

本当に心温まるお話だった。何より読み終わったあとの幸福感。心の奥にジーンと残る愛の深さ、暖かさがしばらく私を余韻に浸した。

令和３年度　清流の国ぎふ・おすすめの１冊コンクール

紹介文部門　奨励賞

奨励賞

昭和２０年８月６日広島　　（鈴木勇治）

［おすすめしたい本］

『リトルボーイ・リトルガール』　内館牧子／著

私は「戦争を知らない子供たち」と言われる世代ではあるが、幼いころには母親から空襲で実家が焼けて門の下で一晩明かしたことや、焼夷爆弾が落ちてきた中を必死に逃げ回って怖かった話を聞かされてきた。父親は兵役でインドネシアに行っていたそうだがその頃の話は一切しなかった。戦後７６年となり、戦争を体験された方がどんどん少なくなっていく時にどうしたら戦争の悲惨さを継承できるのか。この本の冒頭部分に「（原爆のことを伝えようと思っても）近所の高校生に『暗い話はパス！』って言われました」という科白がある。暗い出来事ではあるが、現在の社会は色々な人々の犠牲の上にあることを忘れないために是非読んでほしい一冊である。

主人公は、広島県立安芸高等女学校の一年生の生徒たち。昭和２０年３月１０日から原爆が投下される８月６日までの５カ月弱の彼女らの日常がみずみずしく描かれている。様々な統制の中で、ひたむきに生きる１２歳の少女たちが「リトルガール」である。彼女たちのあこがれは、安芸女伝統の自分たちで縫いあげる白い夏制服。指導してくれる担任でもある女子教師へのあこがれもあり、一所懸命に作業するが、敵の標的になりやすいからという理由で折角完成した白い制服を黒く染めなければならなくなる。落胆する彼女たち、それでも、８月６日から自分たちが縫い上げた夏制服に袖を通すことができるという楽しみのために我慢して染める。その夢を破ったのが「リトルボーイ」という愛称をつけられ、広島に投下された原爆である。最初と最後に置かれた、投下前日に学校を辞めた担任教師と主人公の一人の従兄が元安川にサクランボを投げる場面が印象的である。

首相が広島で行われた平和記念式典の挨拶で一番肝心な部分を読み飛ばして気付かないなど人々の意識の中から原爆を始めとする戦争の記憶が風化されていくように感ずるのは私の杞憂に過ぎないのだろうか。

令和３年度　清流の国ぎふ・おすすめの１冊コンクール

紹介文部門　フレッシュ賞

フレッシュ賞

一人の少女が書いた、アンネの日記　（山口桃香）

［おすすめしたい本］

『アンネの日記』　アンネ・フランク／著

私がお勧めする一冊は、『アンネの日記』です。第二次世界大戦中にヒトラーによって迫害を受けたユダヤ人の十三歳の少女、アンネ・フランクによって書かれた日記です。この本は、彼女の死後に父親、オットー・フランクが出版したものです。

私がこの本に出会ったのは、小学三年生のときです。「アンネの追憶」を観て頭から離れられないほどの衝撃を受け、両親に聞きました。「なぜアンネはこんな生活をしないといけなかったか」「なぜ家族と離れないといけなかったか」戦争を知らない私には到底理解することができなかったのです。私は、彼女のことをさらに知りたくなり図書館に行きました。

ユダヤ人である彼女は、ナチスの占領下で隠れ家での生活を余儀なくされていました。幼い少女が辛い環境の中で常に希望を持ちながら生き生きと生活した二年間が綴られています。身体的・精神的に苦しい状況でも一度も諦めず、笑顔を絶やさなかったその生き様が、文章からありありと想像できました。

読み終わったとき大きな衝撃を受け、そして多くの疑問が生まれました。なぜ、日記が途中で終わっているのか。辞めなければいけない理由があったのか、強制的に辞めさせられたのか。その理由について考えた瞬間その日記が別の物に変わり、書かれている一つ一つの言葉が重くのしかかってくるように感じました。

彼女が綴る占領下での家族の様子、戦争への思い、葛藤などは今でも多くの人に影響を与えています。いつもの平凡で当たり前の日常がいかに幸せか痛感しました。「希望があるところに人生がある。希望が新しい勇気をもたらし、再び強い気持ちにしてくれる」ハッとさせられる言葉で溢れています。ぜひ、アンネの悲しくも美しい青春を感じてみてください。

令和３年度　清流の国ぎふ・おすすめの１冊コンクール

紹介文部門　フレッシュ賞

フレッシュ賞

自分らしく生きる　（入山華奈）

［おすすめしたい本］

『今夜、きみの声が聴こえる』いぬじゅん／著

「でも」、「どうせ」…。皆さんはこういう言葉をよく口にしないだろうか。私もそうだった、この本に出会うまでは。

主人公は茉奈果という自分に自信が持てない女の子だ。祖母からもらったラジオから、ある日突然亡くなったはずの幼馴染の声が聴こえ、「一緒に探しものをしてほしい」と頼まれる。その中で彼女は、出会う人たちと共に「生きていく意味」に気付く。

この本を読みながら、自分も自信が持てず、色々なことを諦めていた事を思い出した。「どうせ自分にはできない」そう言って自分を守っていた。しかし主人公は違った。「後悔は、これから先もたくさん生まれては私の心に傷を残すだろう。だけど、どの傷も精いっぱい生きていれば、いつかはかさぶたになってくれるはず。」たとえ古傷が傷んでも、その時は泣いてもいいと主人公は私に教えてくれた。

特に今、様々なことが制限され辛い想いでいる人もたくさんいるだろう。主人公も多くの悲しみに襲われ、「生きていく意味」を失っていた。しかし、だれかのために勇気を持って行動する姿がきっと悩んでいるあなたに強く刺さるはずだ。ラジオから亡くなったはずの人の声がするという不思議な物語だが、そのような世界観が「生」という大きなテーマにも関わりやすくしてくれる。

「『明けない夜はない』と言われても、今、暗いことが悲しいのだ。いつかくる朝よりも、この暗闇を照らしてほしい。」きっと、自分は何のために生きるのか考えるきっかけになるはずだ。自信が持てなくて悩んでいる人は、この本を読んで主人公と一緒に悩んでみてほしい。

どんなこともネガティブに考えてしまうようなときに、この本が皆さんに寄り添い明るく照らしてくれるだろう。一緒に悩み、一歩踏み出す勇気を与えてくれる。そんな一冊だ。